

教 育 研 究 業 績 書

2019年 5月 1日

氏名 岡 邑 衛 印

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド			
教師教育、教育社会学	教師のキャリア発達、教師の専門性			
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項				
事項	年月日	概 要		
1 教育方法の実践例 特記事項なし				
2 作成した教科書、教材 甲子園大学「教養演習Ⅰ」テキスト「Campus Career File 2015」	2015年 3月31日	甲子園大学栄養学部フードデザイン学科および心理学部現代応用心理学科の1回生履修科目「教養演習Ⅰ」のテキストを、初年次教育委員の一員として作成を担当した		
3 教育上の能力に関する大学等の評価 特記事項なし				
4 実務の経験を有する者についての特記事項 特記事項なし				
5 その他 特記事項なし				
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項				
事項	年月日	概 要		
1 資格、免許 特記事項なし				
2 特許等 特記事項なし				
3 実務の経験を有する者についての特記事項 特記事項なし				
4 その他 日本特別活動学会 研究推進委員会 委員	2015年12月～ 現在			
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1教師のための教育法規・ 教育行政入門	共著	2018年3月	ミネルヴァ書房	2章「学校組織と教育課程」③「児童・生徒と生徒指導」の「校則とは」「懲戒と体罰問題」「進級判定とは」を分担執筆。 「校則とは」：憲法13条との関係から過去に起きた訴訟問題について触れながら、現在、校則の内容については学校の判断が尊重されていることを指摘した。また、校則の見直しについては、市民性教育等の観点から、今後生徒たちによる自主的な見直しの必要性を論じた。 「懲戒と体罰問題」：学校教育法第11条、学校教育法施行規則第26条を参照しながら、懲戒の「法的効果を伴う懲戒」と「事実行為としての懲戒」について確認し、教育的に必要とされるものかどうかを重要であることを指摘した。また、体罰は法律で明確に禁止されていることを確認し、特に部活動のあり方について問題提起を行った。 「進級判定とは」：学校教育法施行規則第57条を参照しながら、進級判定の背後にある2つの履修原理、すなわち「履修主義」と「修得主義」の関係について論じた。また、原級留置について、生徒の学ぶ意欲の低下について十分に注意を払う必要性について指摘した。(頁未定) 編者 古川治、五百住満、今西幸蔵、 分担執筆 伊藤朋子 松井由夫 藤本裕人

2. 特別活動	共著	2018年3月	ミネルヴァ書房	第1部「理論編：特別活動の基礎」第3章「特別活動の評価と課題」第12章「キャリア教育と進路指導」を分担執筆。第3章については「1 評価のための基準作り」「2 多様な評価方法」「3 発達の段階とそれぞれの課題」について執筆した。第12章については「3 高校段階におけるキャリア教育と進路指導」について執筆した。第3章「特別活動の評価と課題」では、新しい学習指導要領をもとに今後求められる評価について論じ、また、児童生徒だけでなく、教員にとっての評価の意味についても解説した。第12章「キャリア教育と進路指導」では、新しい学習指導要領におけるキャリア教育の位置づけを過去の指導要領との比較を通して明らかにし、今後高等学校で求められるキャリア教育について論じた。 編者 中村豊・原清治 分担執筆 岡邑衛、秋山麗子、池原征紀、小原淳一、黒木幸敏、根津隆男、橋本奈々重、森原かおり
3. 平成29（2017）年・平成30（2018）年版学習指導要領対応 キーワードで拓く新しい特別活動	共著	2019年3月	東洋館出版	§7「調査研究、評価の手法にかかわるもの」において、「観察法」について分担執筆した。調査方法としての観察法について、とくに、フィールドワークの際に行なう観察について解説を行った。（p.183） 編者 鈴木樹 分担執筆 岡邑衛、須藤稔、下田好行、上岡学 他。
4. 『生徒指導提要』の現在を確認する理解する	共著	2019年4月	学事出版	第4章「児童生徒理解の資料収集と評価」を分担執筆した。平成22年に公表された『生徒指導提要』のうち、資料収集と評価について、とくにアカウンタビリティが求められるようになったことと、電子記録の取り扱いに一層の注意が必要になったこと等についてまとめた。（pp.30-37） 編者 中村豊 分担執筆 岡邑衛、林尚示、新井肇、藤平敦 他。
(学術論文) 1「学生支援としての『ステップアップ講座』の効果の検証—受講者アンケートの自由記述の分析から」	共著	2015年3月	『甲子園大学紀要』第42号、甲子園大学	甲子園大学において、教育課程外の学修支援事業として実施してきた「ステップアップ講座」の受講者アンケートの分析を通して、同講座が学生にどのような支援をおこなっているかを検証した。その結果、学修内容の多様性の確保、学修の質保証、情意面の効果について、効果が示された。（pp.37-45）第3章「受講者アンケート分析」を担当。増田将伸、西川真理子、上村健二、岡邑衛、滝省治
2「特別活動における栄養教諭の役割」	単著	2016年3月	『甲子園大学紀要』第43号、甲子園大学	栄養教諭7名に対して実施したインタビューをもとに、特別活動における栄養教諭の役割と課題を明らかにした。インタビューの分析結果より、特に若い栄養教諭の特別活動に関する知識の欠如、他の教職員からの協力の欠如、また、栄養教諭の仕事内容に関する相談相手の欠如が見出され、これらの課題への解決策を提案した。 本研究は大阪府下の小中学校の初任期教員に実施した教員の力量形成に関するアンケート調査の分析結果の一部である。職場環境と力量の伸びに関して、小学校では「モデルになる人」がいること、中学校では「他の授業を自由に見学」できる環境があることが最も大きな影響を与えていることが明らかになった。（pp11-15）第3章「職場環境と力量認識」を担当。岡邑衛、鳥善
3. 初任期教員が直面する課題と課題解決課程の振り返りにみる教員の力量形成	共著	2016年10月	『教育実践研究』No. 10、大阪教育大学	大阪府下の小中学校の初任期教員に実施した教員の力量形成に関するアンケート調査の分析結果の一部である。職場環境と力量の伸びに関して、小学校では「モデルになる人」がいること、中学校では「他の授業を自由に見学」できる環境があることについて、講師経験の長さによって、それらの職場環境から受ける影響の大
4. 初任期教員の入職前の経験が力量形成に与える影響	単著	2017年3月	『甲子園大学紀要』第44号、甲子園大学	大阪府下の小中学校の初任期教員に実施した教員の力量形成に関するアンケート調査の分析結果の一部である。師経験と力量の伸びに関して、初任期教員小学校では「モデルになる人」がいること、中学校では「他の授業を自由に見学」できる環境があることについて、講師経験の長さによって、それらの職場環境から受ける影響の大

5. これからのキャリア教育(進路指導) (1)	単著	2017年7月	『教育PRO』 第47巻第16号、ERP	キャリア教育(進路指導)の定義を確認し、新学習指導要領でのキャリア教育(進路指導)位置づけを明らかにすることを通して、今日、キャリア教育(進路指導)の重要性が高まっていることを示した。また、キャリア教育(進路指導)の重要性が高まっている要因について分析し、児童生徒個人の問題にあるのではなく、社会の問題として捉える視点が不可欠であり、また学校教育の限界を念頭に置くことも必要であることを新学習指導要領におけるキャリア教育の位置づけを確認し、新旧の学習指導要領の比較を通して、その多くはこれまでの「特別活動」や「生徒指導」を通して実践されてきたということを明らかにした上で、より充実したものにしていく意義について明らかにした。 (pp20-21)
6. これからのキャリア教育(進路指導) (2) 一特別活動・生徒指導との関係から一	単著	2017年8月	『教育PRO』 第47巻第17号、ERP	大阪府下の小中学校の初任期教員に実施した教員の力量形成に関するアンケート調査の分析結果の一部である。記述分析を実施し、初任期教員の教育観が変容する場面は生徒指導場面であることが多く、その変容についての初任期教員の記述から、「荒れ」等の経験をした教員が自らの価値観を変容させ、児童生徒に寄り添うことの重要性に気付く初任期教員の一つの成長パターン。薬物乱用が若年化しているというイメージについて、省庁が公表する数値データを基に、薬物乱用防止教育は一定の成果をあげており、イメージには誤りがあることを示した。しかし、薬物乱用防止教育の効果が高止まりしている現在、現代の若者が抱える諸問題を理解した取り組みが重要であり、本稿では児童生徒の人間関係に着目し、薬物乱用防止教育に特別活動が有効な役割を果たすことについて述べた。 (pp14-19)
7. 生徒指導場面に見る若手の成長一初任期教員へのアンケート調査の記述回答を基に一	単著	2017年8月	『月刊生徒指導』 9月号、学事出版	若手教師の育成が教育現場の喫緊の課題となっている昨今、学年集団で取り組む特別活動が若手教師の成長に果たす役割について論じた。本稿では公立中学校で実施されている「学年劇」の実践を、フィールドワーク調査で得たデータを基に分析し、若手教師に中心的な役割を与え、周囲の経験ある教員らが陰で若手教師をサポートすることを通して、成功体験をさせるで、若手教師が教員のあり方そのものを考え直す機会。主権者教育や市民性教育の重要性が高まりつつある現在、教職課程を履修する学生らは、過去の学校生活において児童会活動や生徒会活動を体験した記憶を持っているものは少ない。そのような教員志望学生に対する特別活動の指導法として、映画版『コクリコ坂から』を活用する方法の可能性について論じた。
8. 薬物乱用防止教育に特別活動が果たす役割	単著	2017年8月	『月刊生徒指導』 9月号、学事出版	「1 (2) 日本における児童会・生徒会活動をめぐる動向」「5まとめと今後の課題」を担当。(頁未定)
9. 特別活動における若手教師の育ち	単著	2017年10月	『教育PRO』 第47巻第23号、ERP	歌川光一・岡邑 衛、学校教育における文化的行事についての全国調査結果を基に、自由記述の分析を実施した。その結果、意義に関しては、文化的行事は「学習成果の発表の場であること」、演劇は「表現力を高めること」に関する記述が多く、一方、課題に関しては「時間の確保」に関する記述が多かった。特別活動における文化的行事が、様々な時間的制約の中で精選されつつある現在、意義あるものであると実感している回答者の声を整理する意味は大きいと考えられた。 中村 豊・岡邑 衛
10. 特別活動の指導法における教材活用の一視点一児童会・生徒会活動理解に向けた映画版『コクリコ坂から』の活用方法をめぐって一	共著	2017年10月	『学苑』 No. 924、昭和女子大学近代文化研究所	小中学校における「友達」をめぐると顕在的カリキュラムとして、道徳の読み物教材を分析した。その結果、「友達」と学級、学校の結びつきの自明性の揺らぎを背景人、単元として明確に「友情」を掲げる道徳は、その趣旨としては「友達」の範囲を学校に限定してはならないもの、読み物教材においては、特別活動との関連が強く意識されていること等が主な原因となつて、学級が同じであることと友達であることとの環境や場に応じた友達との距離感、友情が芽生えるプロセスが見えづらい状況を確認することができた。
11. 学校教育における文化的行事の教育的意義と課題	共著	2018年2月	『東京理科大学教職教育研究』第3号、東京理科大学	歌川光一・岡邑 衛(1.2.4節分担執筆)
12. 学小中学校における「友達」をめぐると顕在的カリキュラムの検討一道徳の読み物教材に描かれる友情一	共著	2018年2月	『昭和女子大学紀要』、昭和女子大学	

13. 高校生のコミュニケーション能力を育む学級集団に関する一考察—特別活動が目指す「望ましい集団活動」を視野に入れて—	共著	2018年3月	『甲子園大学紀要』第45号、甲子園大学	大学生へのアンケート調査分析を通して、高校生のコミュニケーション能力はいかなる集団で育成されるのかを明らかにすることを目的として、大学生へのアンケート調査を実施、分析した。分析の結果、第一に、高校生は学級内に小集団を形成していること、第二に、彼らのコミュニケーション能力は学級内のカーストによって異なっていると思われること、しかしながら第三に、そのカーストによって自分の意見を発現する機会は制限されていることが明らかになった。すなわち、いかに高いコミュニケーション能力が個人に備わっていたとしても、学級内カーストによってそれを発揮する機会が制限されうることが明らかになり、同時に、機会を制限される学級内カーストが低い生徒たちは学校をつまらないものとして捉えている可能性が見出された。
14. 特色ある小規模校が取る対応—甲子園大学の再課程認定への取り組み—	単著	2018年4月	阪神教協リポート No. 42 (阪神地区私立大学教職課程研究連絡協議会)	特色ある小規模校による再課程認定に向けての取り組みを、甲子園大学を事例に挙げ論じた。再課程認定に向けての準備の課程で、単位数の問題、および新たに追加される予定の科目をどのように組み込むかという問題について述べた。また、小規模大学の特徴として、再課程認定に取り組み始める時期が遅くなりがちであること、取り組みを実施する職員がそのほかの業務と並行しての作業となること、さらに教員数が少ないことが、再課程認定への取り組みを難
15. 生徒指導上の問題としての援助交際再考【査読付】	共著	2018年10月	学苑 No. 936 (昭和女子大学近代文化研究所)	2000年前後に議論された援助交際について、学校現場ではどのように捉えられていたのか、『月刊生徒指導』における言説の分析をおこなった。その結果、その内容は、①人間関係の希薄化を埋めるもの、心の問題としての援助交際、②情報化の影響のひとつとしての援助交際、③大人に価値観の変革を迫るものとしての援助交際、④経済的な理由による援助交際、⑤マスコミによる操作結果としての援助交際の5つに集約され、それぞれが複雑に関係していることが明らかになった。(pp. 55-58) 歌川光一・鈴木翔・岡邑衛・佐々木基裕。
16. 学校教育の光と影	単著	2018年12月	月刊生徒指導 12月号 (学事出版)	生徒指導が最も機能すると考えられる特別活動について、とくに体育的行事、文化的行事において若手教師が注意すべきことは何かについて記述した。体育的行事においては、運動会における組体操の問題、文化的行事については、文化祭、学芸会における演劇の問題について、先行研究ならびに自身が実施した質問紙調査の結果をもとに、教師の批判的思考力が求められていることを指摘した。(pp. 58-61)
17. 生徒指導で育まれる社会的リテラシーに関する研究—大学生を対象とした予備調査から—【査読付】	共著	2019年3月	東京理科大学教職教育研究第4号(東京理科大学)	学校教育における文化的行事についての全国調査結果を基に、自由記述の分析を実施した。その結果、意義に関しては、文化的行事は「学習成果の発表の場であること」、演劇は「表現力を高めること」に関する記述が多く、一方、課題に関しては「時間の確保」に関する記述が多かった。特別活動における文化的行事が、様々な時間的制約の中で精選されつつある現在、意義あるものであると実感している回答者の声を整理する意味は大きいと考えられた。(pp. 23-29) (pp24-25を執筆)
18. 中学時の特別活動の参加経験と学級生活の関連性に関する検討—全国の大学生を対象にした質問紙調査の分析から—	共著	2019年3月	秋田大学教養基礎教育研究年報 第21号	中村 豊・歌川光一・岡邑 衛・鈴木翔。 全国の大学生を対象にした、中学時の特別活動の参加経験と学級生活の関連性についての質問紙調査の分析を実施した。その結果、対人関係に関わるコミュニケーションの類型として、「自己中型」「バランス型」「無関心型」「同調型」にまとめることができた。さらに、特別活動の経験がこれらの類型に与える影響を分析したところ、すべての特別活動の経験が「バランス型」に有意な影響を与えていることを確認した。(pp. 55-65) (pp56-57を執筆) 鈴木翔・歌川光一・岡邑 衛・中村豊。
(その他)				

1. 「若手教師の変容に関する一考察—都市部公立中学校におけるフィールドワーク調査から—」(学会発表)	単独	2014年11月	関西教育学会第66回大会	関西圏の公立中学校におけるフィールドワークで得られたデータをもとに、授業場面外における同僚間のメンタリング機能に着目し、若手教師の成長を分析した。データから、若手教師が校務分掌等の授業時間が以外の仕事の中で、メンタリングを体験し成長していることを実証的に示し、また、メンタリングが若手教師を育てることのみならず、メンター自身の省察を促し、同時に、学校の危機を未然に防ぐ機能を果たす特別活動における栄養教諭の役割について、栄養教諭に対するインタビュー調査を実施し、その現状と課題について考察した。特別活動の時間は栄養教諭による食に関する指導において重要な位置を占めていることは、その制度的側面、内容的側面から明らかであることを示し、そのうえで、栄養教諭の特別活動に対する理解や、栄養教諭に対する周囲の教職員の理解が不足している現状、および、若い栄養教諭の相談大阪府公立小中学校初任期教員(1年目、3年
2. 「特別活動における栄養教諭の役割」(学会発表)	単独	2015年8月	第24回日本特別活動学会近畿大会(関西学院大学)	大阪府下の初任期教員に対して実施した質問紙調査の分析をもとに、教員の力量認識と職場環境との関係について、小学校では「モデルとなる人」がいること、中学校では「他の授業を自由に見学」できる環境があることが力量認識の変化に影響を与えていることなどを明らかにした。岡邑衛、菱米国における近年の学力格差是正策についてまとめ、ノースカロライナ州およびニューヨーク州の事例を通して、その成果と課題を明らかにした。とくに、ニューヨーク市における、民間組織の活躍ぶりは目覚ましく、子どもの低学力、教員不足等の問題に一定の役割を果たしていることが明らかになったが、一方で、そのような動きは、成果主義や授業のフォーマット化などの企業的側面を伴っており、市全体で学力格差是正への均一な支援を行うことについての課題を見出した。(pp.11-56)第4節「象徴的事例」(14頁)の一部を上田と担当。米川英樹、深堀聡子、新谷龍太郎、岡(査読あり)甲子園大学で実施している学修支援事業「ノート大賞」での、学生、職員、教員による「よいノート」についてのコメントの分析を通して、それぞれ立場の違いによって、ノートに対する考え方の違いがあることを示した。学生は色の効果的な使用を、教員は区分けによる情報の整理を「よいノート」の要件として捉えていることが明らかになった。(pp/62-70)第4章「コメントの分析」のデータ分析を担当。
3. 「初任期教員の意識と 4. 「新任期教員の力量形成と職場環境(2)」(学会発表)	単独 単独	2015年9月 2015年9月	第67回日本教育社会学会 第25回日本教師教育学会大会(信州大学)	増田将伸、西川真理子、上村健二、岡邑衛昭和37年の全国調査や同時期の大阪市の学芸会に関する資料をもとに、学芸会の歴史を踏まえたうえで、今回実施した予備調査のデータを通して、学級劇の実施状況等、学芸会の実態を把握し、本調査へとつなげる中間報告を行った。中村豊、佐々木
5. 「アメリカ格差是正と標準化への苦闘—」(報告書)	共著	2014年5月	大阪大学大学院人間科学研究科教育文化学研究室 学力格差是正政策の国際比較 最終報告書	関西の公立中学校におけるフィールドワークを通して、若手教師の成長に良い影響を与えるメンタリング機能について、分析し、「直接的メンタリング」と「間接的メンタリング」に分類できること、またそれ特別活動の文化的行事に着目し、中学校における学年劇の実践に焦点をあて、学年劇の実践の中で積極的生徒指導が機能するメカニズムの一端を、公立中学校でのフィールドワークデータをもとに、実証的に明らかにした。その結果、積極的生徒指導として生徒の主体性等の向上の背景には、学年劇特有の理由として希望する役割につきやすいこと、また、行事が伝統あるものと認識されていること、そして教師が生徒の主体性等を活かす指導を行っていることが挙げられた。
6. 「大学生と大学教職員が考える『よいノート』の要件—『甲子園大学ノート大賞』でのコメントを基に—」(報告書)	共著	2015年3月	徳島大学総合教育センター 大学教育研究ジャーナル 第12号	研究発表要旨集録p29
7. 文化的行事の現状と課題についての検討(学会発表)	共著	2016年9月	第25回日本特別活動学会大会(東京学芸大学)	
8. 若手教師へのメンタリングに関する一考察(学会発表)	単独	2016年9月	第26回日本教師教育学会大会(帝京大学)	
9. 積極的生徒指導としての学年劇の実践—公立中学校におけるフィールドワークより—(学会発表)	単独	2017年8月	第26回日本特別活動学会大会(椋山女学園大学)	

10. 学芸会ならびに文化的行事の教育的意義と今日的課題 ～文化的行事に関する質問紙調査結果を通しての考察～(学会発表)	共同	2017年8月	第26回日本特別活動学会大会 (椋山女学園大学)	学校教育における文化的行事についての全国調査の結果を基に、自由記述の分析を実施した。その結果、意義に関しては、文化的行事は「学習成果の発表の場であること」、演劇は「表現力を高めること」に関する記述が多く、一方、課題に関しては「時間の確保」に関する記述が多かった。特別活動における文化的行事が、様々な時間的制約の中で精選されつつある現在、意義あるものであると実感している回答者の声を整理する意味は大きいと考えられた。中村豊、岡邑衛、佐々木正昭、吉村烈 研究発表要旨集録p30
11. 特色ある小規模大学が取る対応 (研究会報告)	単独	2017年10月	阪神地区私立大学教職課程研究連絡協議会第2回課題研究会 (於 関西学院大学)	「再課程認定をめぐる諸問題」についての研究会で、「特色ある小規模大学が取る対応」について発表を行い、全体討論を行った。佐野正彦 (大阪電気通信大学) 岡邑衛 (甲子園大学) 日浦直美 (関西学院大学)
12. 戦後から1970年代頃までの学芸会の状況 (報告書)	単著	2018年3月	学校教育における文化的行事の研究 (文化的行事研究会)	1960年代、1970年代に実施された学芸会に関する全国調査をもとに、当時の学芸会の実態分析を実施した。具体的には、調査の背景、学芸的行事の実施率、学芸的行事の実施頻度、文化的行事の内容、文化的行事の名称、文化的行事の実施頻度、開催時期、開催場所、上演種目の出典、時間の確保方法、発表当日の観覧者、参観保護者の対児童生徒割合、校区の関心度について、学校種別、地方別に比較分析をおこなった。(pp. 44-60)
13. 学芸会ならびに文化的行事の意義や課題 (報告書)	単著	2018年3月	学校教育における文化的行事の研究 (文化的行事研究会)	「文化的行事に関する全国調査」の調査結果をもとに、学芸会並びに文化的行事の意義と課題について、テキストマイニングソフトを使用し、記述分析を実施した。意義としては「学習成果の発表の場であること」「表現力を高めること」「他者との協力を通して達成感が得られること」が析出され、課題としては「時間の確保」「行事の精選」「教員の指導力」が析出された。
14. 宝塚市立宝塚中学校の文化発表会 (報告書)	単著	2018年3月	学校教育における文化的行事の研究 (文化的行事研究会)	宝塚市立宝塚中学校で実施されている文化発表会 について、参与観察を実施し、エスノグラフィーの記述を試みた。とくに学年劇に焦点を当てた結果、学年劇が始まった歴史や生徒の主体性を育てる様々な仕組みが伝統的に根付いていることが明らかになった (pp. 187-198)
15. 教師教育における文化的行事の意義に関する一考察—高等学校における演劇教育を事例に— (報告書)	単著	2018年3月	学校教育における文化的行事の研究 (文化的行事研究会)	教員に必要な資質・能力を育成する手段としての演劇教育の可能性について論じた。兵庫県立宝塚北高等学校演劇科における参与観察、福島県立いわき総合高等学校、追手門学院高等学校で実施されている演劇教育についてのインタビュー調査を実施し、演劇で培われるコミュニケーション能力が、現在教師に求められる資質・能力と重なることを明らかにし、教師教育に対する新たな知見を提供した。(pp. 242-252)
16. 特別活動と「積極的な生徒指導」—社会の形成者としての資質を涵養する特別活動— (学会発表)	共同	2018年8月	第27回日本特別活動学会大会 (於 武蔵野大学) 研究発表要旨集録 pp74-75	特別活動の効果として、「積極的な生徒指導」で育成を目指す社会的リテラシーが形成されることを検証するために、大学生を対象に実施した質問紙調査を分析し、課題研究として発表した。ここで測定した資質・能力は自尊心、自発性・自主性、自律性などからなる、非認知的能力であり、社会的リテラシーとも呼ばれるものである。分析の結果、特別活動の行事はこれらの能力を向上させる効果があること、学級の環境が良好であることが、特別活動への参加を促進させること等が明らかになった。岡邑衛、歌川光一、鈴木翔 研究発表要旨集録pp74-75
17. 若手教師の成長における「転機」 (学会発表)	単独	2018年9月	日本教師教育学会第28回大会 (於 東京学芸大学) 研究発表要旨集録 pp206-207	若手教師の成長における転機について、自由記述の分析を含む、質問紙調査の量的分析を実施した。その結果、第1に小学校では「子ども理解」が、中学校では「生徒指導」が対照的に大きな要因になっており、第2に中学校教師の「生徒指導」における転機は、小学校教師の「子ども理解」における転機と比較して、「同僚・先輩教職員」が多くかかわっていることが明らかになった。 研究発表要旨集録pp206-207

<p>18. 生徒指導で育まれる社会的リテラシー ～大学生を対象とした調査から～ (研究会報告)</p>	<p>共同</p>	<p>2019年1月</p>	<p>日本特別活動学会第2回研究会 (於 東京理科大学)</p>	<p>科研基盤研究(C)(研究課題名「特別活動と積極的な生徒指導—社会の形成者としての資質を涵養する特別活動—」課題番号18K02548)において実施した質問紙予備調査のまとめの一部を報告した。とくに、「非認知的能力」に関する先行研究をまとめ、本研究の位置づけについて発表した。 岡邑衛、歌川光一、鈴木翔</p>
--	-----------	----------------	--------------------------------------	--

